

昏黄の海

若草の淡き薫を嬉しみて輕き心に雨後の野をゆく。
朱に染める眞帆の光れば紺青の浪爪立てり黄昏の海。
日の落ちて眞帆の朱の色うすれゆくそのたまゆらぞ海は悲しき。
節毎に樺色の皮のこしつゝ水々しうも伸びし若竹。
若竹の薄月浴びて匂ふ哉水無月の夜の窓に向へば。

七夕

あたゝかき春の日あひて生々と日ことのひゆく幸多き草。
安かに芽をふく草の幸を思ひてぞよる野のみゆる窓。
風そゝく女竹のもとに妹の緋の袖ゆらく七夕の宵。

すゝらんたまひし北の友に

父母のすむ野したひて泣くならんほろゝと散る鈴蘭の花。
はるゝと海こえて來し花なれば旅の愁のほの見ゆるかな。

玉のくづしろかねのくづほろゝと膝にこほれぬ鈴蘭の花。
初夏の野邊の白露花のつゆむすびしがことさけるすゝらん。

ちさき生命

わか草の踏み心地よき春の野を小鳥の如く飛ぶ嬉しさよ。
ほの青く芽を出したる若草の小さき生命のいとほしき哉。
さやゝと朝風吹けばおほらかに海の上すへる白き帆の船。

逝ける友

文二 た け を

この秋は肩揚げとるとちぎりにし君は早くもゆきていままさず。
さびしくも夏の夕ぐれ咲出づる花ににたりき君のすがたは。

わか葉

L.

うらやましうれへかなしみもだえなごいふ事なけにひかれる若葉。
あまたなきわか春ひとつまたゆけばなみだながして空をあふぎぬ。
つやゝかに日にてりはえて若き葉のさゝめく中にわたてるかな。

S.

エプロンにあわきみどりのかげさしぬうらゝに日てる初夏のまど。
かさなれる森のわかばのたえまゝみそら見いでしかろきうれしさ。
うれしさの胸にあふるゝ心地して朝の森のわかばをぞみる。
さしてゆくわか傘の上にちら／＼とわかばがさす野邊のほそみち。
日のあたる垣根の竹に足袋はしぬ紅の花ちるゆく春の朝。
たかむらにうぐひすなきてゆく春の淋しき寺にわれは來にけり。
わが背戸の桐の葉毎につゆおきてさみだれはれぬ日曜の午後。
くれちかき春の日かげにかゝやける空みるごとに海をこそ懷へ。

朝のひかり

赤城にて

T.

H.

うすあはく若葉のかをりかきろへば故郷人のしのばるゝかな。
わかほもる朝の光を身にあびてひとりぞうたふ夏に入る幸。
わかにはほふ大野あゆめはひや／＼と袖にこぼるゝ朝つゆもよし。

感

想

不惜身命

仰

妙

法華經勸持品曰、不愛身命、惟惜無上道と。これ、
實に、人生最後の歸結、常住の妙處にして、人生の
意味を豊富高尚にし、理想を追求して己まざる、大
奮闘心大努力心を賦與し、吾人をして、眞の安禪境
に導くもの、またこれによるにあらざるべきか。彼
の基督教に所謂、砂上に礎せる家屋の如く、日々に
傾きて安からず。時に、洪水暴風ある毎に、忽ち顛
覆して、その所を知らざるもの、また多くはこれを
失へるによるるべし。然らば、吾人は、かくも尊
き靈性をば、いかにして保ち、いかにして養ふべき
か。知らず、唯、天の理、人の性に從ふのみ。易曰、
天大徳日生と、生々不已之謂也。見よ、蒼々たる天
に、日月ありて高く輝き、曠々たる地に、草木あり
て常に榮え、鳥獸は喜々として、空を翔けり、地を
走るを。これ一に、日月の運行、その軌を誤まらず、
雨露の降ること、その宜しきを失はざる、赤誠仁愛

なる、天理の主情に發するにあらずや。而して吾人
聞くあり、宇宙は一元氣のみ。理なるものは氣中の
條理なり。氣集まりて物を成せば、理もまた從ふ。
しからば、この氣の集まりて、吾人を造るや、理も
また方に從ふべし。人の性なるもの、即ちこれなり、
と。然らば、至誠は人の性なり。仁愛は、人の性な
り。孟子の性善説に曰く、人の性や、惻隱羞惡辭讓
是非の四端を有し、四端の實行せらるゝや、即ち仁
義禮智の四徳を生ず、と。しかも、これが、源動力
となり、四端の實行をして、最大最善の効果を收む
るものは、吾人の至誠より迸出せる、不惜身命の行
爲にはあらざるべきか。

抑々、高き天と、厚き地と、吾人とは、宇宙の三
寶なり。而して、天に、理ありて、その尊きをなす
が如く、吾人、人類におきて、尊きものは、唯、こ
の靈性をやどせる心あるがためなり。見よ、この心
の偉なるや、よく日月の精を知り、山河の妙を感じ、
五尺の肉身に宿れども、時に、山川を超え、日月を
貫きて、宇宙の外に出でんとし、肉體や、五十年の
生涯にすぎざれども、靈や、よく、万古の古より、